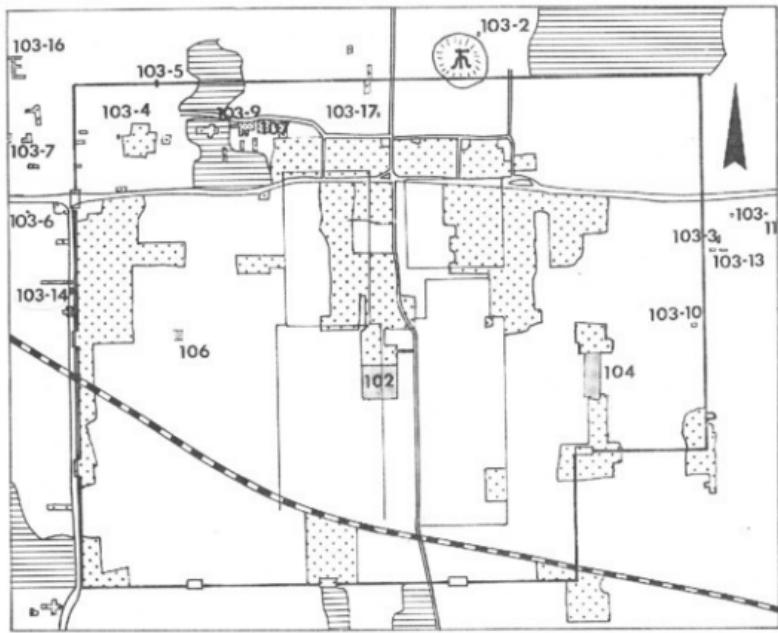


昭和52年度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



昭和53年4月

奈良国立文化財研究所



第1図 平城宮発掘調査位置図

表紙カットは第104次調査出土唐草文須恵杯蓋

目 次

I	推定第1次朝堂院地区の調査（第102次）	3
II	東院地区の調査（第104次）	9
III	宮跡内その他の調査	
①	佐伯門東方の調査（第106次）	19
②	佐紀池東辺地区の調査（第103-9次、107次）	21
IV	平城京の調査	
①	左京三条二坊七坪の調査（第103-1次）	23
②	左京四条三坊一坪の調査（第105次）	25
③	左京三条二坊六坪の調査	27
④	西一坊大路の調査（第103-8、14次）	31
⑤	右京一条二坊の調査（第103-7次）	34
⑥	北辺坊の調査（第103-16次）	35
⑦	左京三条一坊二坪の調査（第103-15次）	37
V	寺院の調査	
①	薬師寺の調査	38
②	法隆寺の調査	44

昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和52年度の発掘調査を第1表のように実施した。以下概要を報告する。

※本概報に収録

次 数	調 査 地 区	面 積	調査期間	備 考
※102	第一次朝堂院	3,720	77年 4.6~7.12	
※103 - 1	左京三条二坊七坪	(奈良市北新町199-1) 111-2 112-1	900	5.9~6.2 明新社駐車場
2	平城宮跡東北端	(〃 佐紀町22-7-3)	20.8	5.9~5.14 三井撤氏宅
3	東二坊坊間路	(〃 法華寺中町806)	20	5.17~5.18 岩城辰藏氏宅
4	平城宮西北隅	(〃 二条町1-2533-1)	8	6.15~6.16 戸尾林太郎氏宅
5	北面大垣	(〃 佐紀町2-2689)	39	8.26~8.28 戸尾直樹氏宅
6	右京一条二坊三坪	(〃 二条町2-2-9)	33	9.26~9.28 山尾宗一氏宅
※ 7	右京一条二坊一・二坪	(〃 二条町1-26-1-27) -1	800	10.17~11.12 ファミリー駐車場
※ 8	西一坊大路西側溝	(〃 尼ヶ辻89-1)	24	12.12~12.16 奈良県浄化センター
※ 9	佐紀幼稚園	(〃 佐紀町2715)	900	1.9~2.8
10	東面大垣	(〃 法華寺中町674)	7.6	11.18~11.11 銀河利一氏宅
11	東院東	(〃 法華寺北町937-1)	2.7	1.9~11.10 東口コト氏宅
12	高麗王寺旧境内	(〃 法華寺東町898-3)	4.8	12.2 高橋一久氏宅
13	東二坊坊間路	(〃 法華寺町853)	2.5	12.5~12.6 川崎喜代吉氏宅
※ 14	西一坊大路側溝	(〃)	500	1.9~ 奈良県浄化センター
※ 15	東一坊坊間路	(〃 北新町221)	90	1.31~2.14 福山重一氏宅
※ 16	北京極大路	(〃 山穂町89-91) 96~98)	1,300	2.28~ ファミリー駐車場
17	第1次内裏北方官衙	(〃 佐紀町中町2770)	5	3.1~3.2 両田留藏氏宅
※104	東院地区	(〃 法華寺中町)	2,700	8.4~11.12
※105	左京四条三坊一坪	(〃 三条町421-3)	554	6.28~7.30 奈良市有地
※106	平城宮佐伯門東方		736	6.22~8.1
※107	平城宮佐紀池東		1,130	11.14~12.27
108	左京六条三坊	(〃 大安寺町13)	270	10.4~10.19 大安寺小学校建設
※109	左京三条二坊六坪	(〃 尼ヶ辻69-1)	1,100	11.21~12.27
その他	※薬師寺僧房北方	(〃 西ノ京町460)	120	11.14~11.26
	※薬師寺小子房・十字廊	(〃)	749	78年 1.7~4.6
	大安寺西中房	(〃 大安寺町1147)	77	77年 10.17~10.25 大安寺小学校建設
	※法隆寺西大門脇	(生駒市立馬町法隆寺)	24	8.19~8.24 西大門監査所跡

第1表 昭和52年度発掘調査一覧表

I 推定第1次朝堂院地区の調査（第102次）

平城宮跡第102次発掘調査は、推定第1次朝堂院地区の東北部（6ABF-B、6ABG-A、6ABS-B、6ABT-A地区）で行なった。調査地区の北は昨年度におこった第97次調査地に接する。本調査地区内には建物の基壇跡と考えられる土壇が2つ存在するが、この土壇はまた、第97次調査で確認した礎石建物SB8400の南延長部があり、今回はこの礎石建物基壇の南限と七壇との関係をあきらかにするためにおこなった調査である。調査は昭和52年4月6日に開始し、8月29日に終了した。調査面積は3720m²である。

1 遺構

調査区は推定第1次内裏地域から延びる小支丘の東南部で、東・南に下るなだらかな斜面部にあり、谷筋に沖積した軟弱な黒色粘土が地山面である。地山面は西・北が高く、東・南が低い。これを整地で平坦にし、遺構を構築している。地山面に盛った整地土は4層に分かれ、下から第1整地層、第2整地層、第3整地層、第4整地層と名付けた。検出した主な遺構は、建物2棟、掘立柱塀3条、築地塀1条、溝10条などである。これらの遺構は整地層を基準に4期に分けられる。

第1期

第1整地層に造営された遺構で、溝1条、塀1条がある。

SD3765は築地の西4mにある南北溝である。第1整地層上面から掘り込まれ、第2整地層で埋め立てられる。調査区を南北に貫き、さらに南に続く。溝幅2~2.5m、深さ60cmあり、溝中には2層の堆積がみられる。下層は青灰色砂層で厚さ15~20cm、上層は暗黒灰粘土が堆積している。調査区の南を20mの範囲で掘り下げたが、埴輪片が若干出土したのみである。整地層との関係からSD3765は和銅造営期にはさかのばらない。

塀SA8410はSD3765の東17.5mにある掘立柱南北塀である。柱間は10尺で19間分を検出したがさらに南に続く。柱掘形は一辺1.5~2.0mの矩形で、深さは約40cmで浅い。底面は凹凸が激しく、柱痕跡がないことから、掘形だけを掘って計画変

更したものと思われる。なお、北から10間目と11間目の掘形から、木簡が1点ずつ出土している。うち11間目の掘形出土木簡は若狭国の米の付札である。年紀はないが、記載内容から和銅年間に比定される。

第2期

第2整地層上に造営された造構で、土手状高まり2条、塀1条、溝2条がある。土手状高まりSX8560は築地下にあり、調査区の南北を貫いて畦状に築かれる。幅1.5m、高さ35cmあり、発掘区の南端近くで、東西方向に走るSX8559とつながる。SX8559の西端はSB8550の基壇掘り込みで壊され、SD3765上には存在しない。

SX8559は、幅1.8m、高さ30cmである。

塀SA5550Aは推定第1次朝堂院の東面を画する南北塀である。第41・97次調査で26間分(77m)確認しているので、今回の19間分を含めて合計46間分(137m)を確認した。柱間は3m。掘形は約2mの方形で深さは1.2mである。この塀の廃絶後、第2整地層に浅い掘り込みをし、地業をおこなった上に築地が作られている。第97次調査では、SA5550A・B・Cの3期を想定し、塀→築地→塀の変遷を考えたが、今回の調査で、SA5550CがSA5550Aの柱の抜き取り穴であることを確認した。したがって3期の変遷ではなく、塀→築地の2期の変遷となる。SA5550Aは推定第1次朝堂院の想定中軸線から東へ107m(360尺)離れ、塀で囲まれる推定第1次朝堂院の東西幅は214m(720尺)となる。抜き取り穴からは瓦が出土しているが、SA5550Aは藤原宮式の瓦を葺いた南北塀と考えられる。

溝SD3715は平城宮の堆定第1次朝堂院と推定第2次朝堂院の間を流れる南北大溝で、幅2~3m、深さ1mである。奈良時代を通して存続する。上層溝、下層溝の2期に分かれる。下層溝は下から暗黒色粘土(厚さ5~10cm)、黄褐色粗砂(10~15cm)、黒色粘土(30~35cm)の3層があり、このうち黒色粘土層が第97次調査で158点の木簡を出土した暗灰粘土層と対応する。本調査でも木簡は出土したが数は少なく、土器・瓦類の出土も少ない。上層は灰色砂礫層と灰色バラス層の2層に分かれ、灰色砂礫層から木簡が出土し、なかに「去天平五年」の紀年木簡があった。第97次調査暗灰粘土層出土木簡の年紀と考え併せると、本溝の改修の時

期を天平初年頃におくことができよう。

第3期

第3整地層上に造営された遺構で、礎石建物2棟、築地溝1条、溝1条などがある。築地SA5550Bの基底部積上は、SA5550Aの柱を抜いた後、第2整地層上面に粘質土、砂質土で積まれる。積土は西縁に良く残っており、東側は明治以降の用水路で壊されており、築地本体の幅は確認できなかった。築地西縁に沿って南北溝SD8392がある。幅40cm、深さ5~10cm程の溝であるが築地西側の雨落溝と考えられる。

SB8400(東第1堂)・SB8550(東第2堂) SB8400は南限を検出し、第97次調査と合わせてその規模が明らかになった。SB8400の基壇積土は調査区北端から30mにわたって検出した。その南9mが途切れ、SB8550の基壇積土が南に続く。東西幅は19.6mであり、積土上面で礎石据付痕跡9個所と足場用柱穴SB8554・SB8555を検出した。礎石据付痕跡の遺存状況は悪いが、南北15尺、東西11.5尺間隔に根石が並ぶ。うち1ヶ所を断ち割ったが、浅い皿状掘形の底部に敷き並べてあり、掘形の底は基壇掘り込み面より50cm程上面になる。足場穴SB8554・SB8555は15尺間隔で南北方向に柱筋を揃える。SB8554は東西縁で重複がみられる。新しい足場穴SB8554BはSB8400の部分的補修(改築)のための施設と考えられる。この結果SB8400は東西長19.6m、南北長50mの基壇で桁行10間15尺等間、梁行4間11.5尺等間の南北棟建物を想定できる。SB8550もSB8400と梁行が等しく、桁行5間分を検出し、さらに調査地区外の南に続いている。なお第97次で検出した礎石の高さが1mあり、今回検出した根石レベルが地業面から50cmあることから、1.5m程の基壇高が想定されようが、階段や地覆石などの形跡はみられなかった。また基壇実測後、数箇所にトレンチを設けて基壇築成状況を追査したところ、複雑な地下地業をおこなっていることがわかった。それによると、まず基壇範囲を掘り込み、黄褐色土を入れて版塗状につき固めるが、ちょうど各桁行柱に相当する部分は掘り残し、更にこの掘り残した部分も棟通りを除いて坪掘りを行い、暗褐色土を入れて版塗状につき固める。この地業はSB8400とSB8550を一連でおこなって

いるが、両建物の基壇間にあたる部分だけは坪掘りをおこなわずに、東西に長い布掘り状の掘り込みをして版築をおこなっている。一見2段階にわけておこなわれたようにみえるこの地業のうちで、坪掘り部分は南北方向で各16尺間隔にあり、基壇上面の残存根石列から想定される桁行柱間15尺と異なっており、このずれがSB8400では南で小さく、北に従って大きくなり、SB8550では北で小さく南に行く程大きくなる。この相違についてはなお検討の余地があるが、当初桁行柱間を16尺等間で計画していた建物を地下地業の段階で何らかの理由によって当初の柱位置をずらす必要が生じてきたため掘り残した部分も坪掘りをおこなった結果ではないかと考えられる。

溝SD8552は調査区の南北を貫通し、南に続く。幅70cm、深さ25cmあり、やや規模は小さいが、築地と基壇建物を区画した溝と考えられる。この溝の東西縁にそつてSA8553があるが、規則的な間隔はとらず南の方で消滅する。

土壌SK8563は6ABT区南で検出した。6ABT区内より南に延びる幅15cm、深さ5~10cmの細溝SD8561に切られている。長径80cm、短径30cm、深さ20cm程の小土壌である。

第4期

SB8400・SB8550廃絶後の時期である。第97次調査でSX8390とした瓦を多量に含む整地層（第4整地層）と同一で、出土遺物から平安時代以降とみられる。

凝灰岩列SX8551は、約50cm平方、厚さ8cmの凝灰岩切石を東西方向に一列に敷き並べたもので、10枚を残すが性格は不明である。この他に溝SD8556がある。

2 遺物

1 木簡

木簡はSA8410の柱掘形埋上から2点、SD3715から28点の計30点出土した。このうちSD3715では上層と下層溝から各々14点ずつが出土している。以下、おもな木簡を例示する。

少丹生里米七斗(戸ガ)
秦人老五口

SA8410の北から11間目の柱掘形より出土。米の付札。和名抄の若狭国遠敷郡遠敷

郷にある。里制であることや里名記載が和銅六年の国郡里制の好字表記以前の記載であることから和銅年間のものと考えられる。

- ・右以去天平五年八月廿一日□

□遣服罷仍具錄以申送

- ・「伊福部宿祢廣濱^{年卅二}大倭國十市郡」(側面)

年紀を有する唯一の木簡。表は服喪による休暇願の内容である。

- ・受古釘六隻重十二斤 捧^二斤八兩^(作)口五寸打合釘

- ・五十一隻 四月廿二日刑部麻呂

釘作成に関する文書。SD3715上層溝出土。なおこれに関連してSD3715からは第97次調査で神龜～天平初年の造営関係の木簡が出土している。

以上その他にSD3715から讃岐国山田・那珂郡、近江国浅井郡の貢進物付札がある。

2 瓦

瓦は軒丸瓦299点、軒平瓦250点の他に丸瓦、平瓦がセメント袋500袋程が出土した。大半が第4整地層出土である。軒丸、軒平瓦では全出土数の約80%が平城宮造営当初から天平年間までのI・II期の瓦である。SA5550抜き取り穴から藤原宮式の瓦が出土しているが、SA5550に葺かれたものと考えられる。整地層出土の瓦のうち、築地西側の第2整地層上面、第3整地層からI・II期の瓦がほぼ同じ比率で出土している。しかし、築地東側の第2整地層、第4整地層でII期の瓦が圧倒的に多くなる。瓦の出土状況からも築地の東西で整地の様子が異なっていることが指摘できる。

3 土器

土器の出土量は少なく、朝堂院地区の特徴を示している。

4 木製品

人形1点、杓子2点、笄1点、箸10点、礎板1点が出土した。その他に加工棒・板約400点、加工木約150点がある。すべてSD3715からの出土である。

まとめ

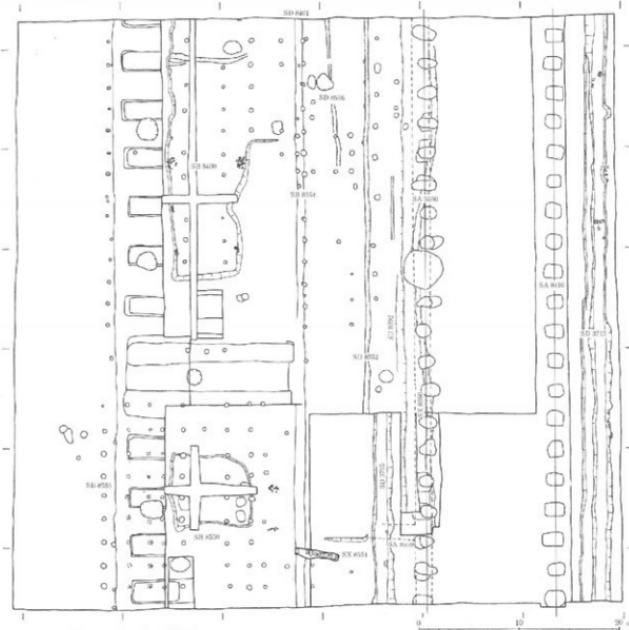
第1～4期の性格、時期を推定第1次内裏地区の変遷、第97次調査で設定した

A～D期と対応して考えてみたい。ただ今回の調査では第97次調査のA期（和銅創建当初）に比定できる遺構は存在しなかった。

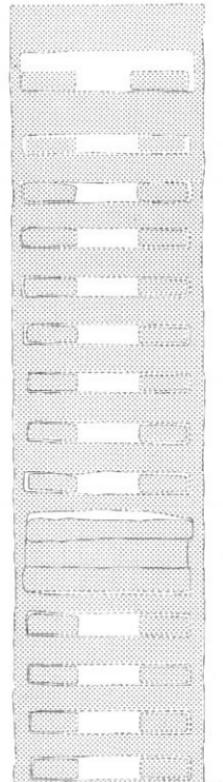
第1期： 第1次内裏地区変遷のAⅠ期、第97次調査のB期にあたる。SA8410は柱痕跡がみられず、掘形底面は浅く、軟弱で凹凸が激しかった。SA8410は計画しただけで廃絶した可能性が強く、実際に機能していたかは問題である。第97次調査以北が未調査であることから、SA8410が推定第1次朝堂院の東面を画する施設であるかどうか断言できないが、推定第1次朝堂院の想定中軸線から東へ約120m(400尺)の位置にある中軸線で折り返し、SA8410で区画された場合の東西幅を求めるに、約240m(800尺)となり、藤原宮朝堂院の東西幅よりやや大きい区画となる。

第2期： 内裏地区変遷のAⅡ期、第97次調査のC期にあたり、靈亀～養老年間に相当。SD3765・SA8410がともに廃され、第2整地層上に造営がおこなわれる。第97次調査で検出したSA5550A・Cは、今回の調査で第2期の塀の掘形と抜き取り穴であることを確認した。第97次調査同様、今回の調査でもこの時期に比定する朝堂建物は検出していない。

第3期： 内裏地区変遷のAⅢ期、第97次調査のD期に対応する。SA5550A・Cを埋めて、築地に建て替え、SB8400・SB8550の地業をおこなって建物を建てる。この期の整地は朝堂院地区内に限られ、築地の東には存在しない。また朝堂建物を神亀年間におくことは、第97次調査の知見と矛盾しない。第3期を通じて、推定第1次朝堂院地区の建物の基本的な変化はなく、宮廃絶まで存続したと考えられる。そして第4期(平安時代以降)には、朝堂建物は存在しなかったことになる。



第2図 第102次調査構造図



SB8400・8550基壇掘込地業復原図

II 東院地区の調査(第104次)

調査地は平城宮東院地区にあたり、第22次南調査区と第43次調査区との間にはさまれた 6ALR-S・T・U 地区である。従来の調査結果によると、当初東一坊大路の道路敷を想定していた位置には、大路推定地上に時期を異にする多くの遺構を検出し、宮域が東へ拡長されている事実を知った。今回の調査では大路の存在や東院西辺地区的性格などの点を一層明らかにすることを目的とした。調査期間は1977年8月4日に始まり、11月12日に終了した。発掘面積は約2500m²である。

1 遺構

調査地は、谷筋にあたる低湿地である。遺構はこれらの地山面上にもあるが多くは整地面で検出した。検出した主な遺構は、據立柱建物21、掘立柱塀15、栗石盲暗渠4、溝45、長方形土壙1、布掘り地業1、井戸1などで、これらの遺構は、大きくA～Fの6期に時期区分することができる。

A 期

平城宮造営前後の遺構のきわめて少ない時期である。この時期の遺構としては、栗石盲暗渠4条、溝23条、長方形土壙1個所、布掘り地業1個所がある。

SD8601～SD8604 直径5cm前後の栗石を幅0.5m前後に敷きつめた東西方向の盲暗渠である。それぞれ、11.3m、11.8m、9.0m、11.0m分を検出した。この排水施設の勾配は、西から東にかけてゆるやかに傾斜しているところからSD8585に流しこむ暗渠と考えられる。後期の遺構によってかなり削平されている。

SD8585 南北の素掘り溝でその幅1m、深さ0.7mである。この地区の主要な排水路と思われる。この溝全体を発掘せずに、ほぼ溝の同一線上で南北に東西のトレンチを5箇所設け、各トレンチで同規模の溝を確認した。

次にA期の中で発掘区の北東から南西にかけて走る斜方向の溝SD8600が作られこの地区的様相が一変する。

SD8600 溝幅は平均3m、南に折れ曲がったあたりからは2m、深さは大体0.6mである。全長約92mを検出したが、その両端は未発掘地へ延びている。又、こ

の溝の両岸より、護岸用施設としてのシガラミを検出した。遺存状態は非常に良好で、現在でも土木工事でこの手法が使われている点を考えると、真に貴重な遺構である。さらに注目すべき点は、この溝内の堆積土、整地土から多数の木簡、多量の土器が出土したことである。木簡は、堆積土中から 107 点、この溝を埋めた整地土中から 18 点の出土をみた。この中で年紀のあるものが 9 点あり、すべて和銅年間のものである。年紀がないものでもその内容から推して、ほぼ同時期であることが判明した。同時に、この溝から、多様な器種の土器が大量に出土した。平城宮の土器の編年によると、平城宮 I（710 年頃）、II（725 年頃）に属するものが主体である。また斜行溝を埋めたてた木屑層から出土した土器も平城宮 I、II に属する。このことからこの溝の存続期間は、平城宮造営当初から天平初年頃までに限定できる。この遺構は、奈良時代初期の木簡、上器の一括大量出土例として重要である。なお瓦塼類はほとんど出土していない。

SD 8645 これは SD 8646 南北石敷溝を作る為の地拵えである。まず、SD 8585 を埋め、その上部に幅 1.7 m、深さ 0.4 m の布掘り地業を行なった後に南北石敷溝を作っている。整地土には明褐粘質土にパラス混りの土を使用している。

SD 8646 SD 8645 の東側を約 0.2 m 挖り下げて作った溝幅 0.4 m の南北石敷溝である。長径 0.2 ~ 0.3 m の安山岩を溝の側石と底石に使用している。側石、底石とともに残存しているところは調査区の北方で 1 m ばかりである。この石敷から南に 10 m は、側石、底石の抜き取られた痕跡が顕著に残っている。この溝の北延長部は削平されてしまっているものの、布掘り地業は更に北へ伸びている。南は長方形土壙 SK 8630 と接したところで終わっている。この時期に一度本格的な排水路を作ろうとしていたことがうかがえる。

— SK 8630 東西幅 4.6 m、南北の長さ 21 m、深さ 0.3 ~ 0.4 m の長方形土壙である。この遺構がどういう性格のものであるかは今後の検討を要するが、SD 8646 の南北石敷溝と接しているところから水を溜めるための施設であった可能性が強い。この土壙の埋土からも、SD 8600（斜行溝）の場合と同じく和銅、靈龜の年紀をもつ木簡や、平城宮 I・II の土器型式をもつ土器が出土した。従ってこの長方形土壙

も奈良時代初期の遺構である。

その他、19条の東西素掘り溝、6条の南北素掘り溝がA期の遺構として検出されたが、遺構としての性格は明らかでない。

B 期

A期の斜行溝、長方形土壙を木屑、木炭殻、灰白色粘土等で埋め立てた後、この地区全体の整地を行ない、調査区の西辺を南北に走る掘立柱で区画し、この地区に官衙的な要素の強い大規模な建物が建ち始めた時期である。

遺構の特徴は、次のような点である。南北棟が多く、柱掘形は不整形で、大きく、深いこと、掘形の埋土と整地土に灰白色粘土を使用している点があげられる。この時期の遺構としては、掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条、溝5条がある。

SA3237 この掘立柱塀は、第22次南調査で確認されたものと一連のものであり、今回南へ32間分を検出した。柱間は10尺等間である。掘形は大きいもので2m以上あり、深さは1.5m前後ある。掘形は大体円形に近いが、不統一である。この遺構は、東院以西の地区と東院地区を限った施設と考えられる。

SB8570 8間以上×2間の掘立柱南北棟である。発掘区以南へ張り出すため、建物規模は不明である。桁行10尺等間、梁行10尺等間。

SB8571. 4間×1間以上の西廂付き掘立柱南北棟であるが、発掘区以東へ張り出すため建物規模は不明である。桁行8尺、梁行7尺。

SA8575・SA8574にとりつく南北方向の掘立柱塀である。同方向塀SA8573と一連のものである。東西方向の塀SA8574と接したところから北へ4間のびている。柱間10尺。

SB8618 3間×2間の南北棟掘立柱建物である。桁行6尺等間、梁行6尺等間。なお、D期の南北溝SD3236で妻柱が削平されている。

SB8580 11間×3間の東廂付き南北棟掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行10尺等間である。今回の調査区で最大の規模をもつ。身舎部分の南妻柱の柱抜き取り穴の埋土から、天平十□年の年紀のある木簡が2点出土した。従ってこの建物の廃絶時期を天平末年と決定できる。なお、東廂の側柱は、北から5間分を検

出したが、それから南については、E期の石敷溝がこの柱筋の上に重複している為に、3個の柱穴については、未検出である。

SB8578 7間×1間以上の西廂付き南北棟掘立柱建物である。発掘区以東へ張り出すため規模は不明である。北側柱列はSB8580とそろう。桁行9尺等間、梁行8尺等間。

SB8582 1間×1間の掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行9尺等間。

SA8572 SB8571の南にある東西方向の掘立柱塀で1間分を検出、柱間8尺。

SA8573 SA8574にとりつく2間の南北方向の掘立柱塀である。柱間10尺。

SA8574 SA3237にとりつく東西方向の掘立柱塀で6間分検出した。柱間10尺。

SA8576 SA8574から北へ18m間隔をおいてSA3237にとりつく東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間10尺。SB8580の南側柱から3m南に位置している。

SA8579 SD8645の布掘り地業の上から掘込み、SA8581に3間分とりつく南北方向の掘立柱塀である。掘形は直徑1mの円形状である。柱間10尺。

SA8581 SA8579にとりつく東西方向の掘立柱塀で5間分検出した。そのうち西から4間目の柱穴は、E期の井戸で削平され、検出できなかった。SA8579の掘形とは異なり1m以上の方形をしている。柱間9尺。

SD8615 この素掘り南北溝は、SA3237にともなう溝であると同時に、この地区におけるB期の主要な排水溝と思われる。かなり削平されているため、途中途切れ途切れの状態でしか検出できなかった。

SD8647 この素掘り南北溝は、SB8570に伴う雨落溝と考えられる。

SD8616 この素掘り東西溝は、SD8647と接続しこれと一連の溝である。

C 期

B期の南北棟から東西棟へとこの地区の大規模な改修工事が行なわれ、以前の状況とは全く別種の建物構成の遺構となる。いずれも同一規模の建物が6棟、それぞれ4mの間隔をおいて、南北に整然と配置され、もっとも官衙的に整った様相をおびた時期である。又、東西棟の東側柱の柱筋が東一坊大路の中心線と合致している点など、この地区的敷地地割を考える上で興味深い。この時期の遺構には、掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条、溝2条がある。

SB8590、SB8591、SB8592、SB8593、SB8594、SB8595 これらの6棟の建物は、5間×3間の南廂付き東西棟掘立柱建物である。各建物間は、いずれも4mの間隔をおいて整然と並んでいる。桁行10尺等間、梁行9尺等間。

SA8577 SB8592の東側柱から2.7m東に位置している南北方向の掘立柱塀で北へ10間分検出した。南へは、まだ続いている可能性があるが、発掘区外のため不明である。柱間10尺。

SA8596 SB8595から北へ4m間隔をおいて、東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間9尺。

SA8597 SA8596から北へ約16m間隔をおいて東西方向の掘立柱塀で7間分検出した。柱間9尺。

SD8644 東西方向の素掘り溝で、SA8597にともなう溝と考えられる。

SD8615 B期のSA3237にともなう溝であったが、この柱塀を廃絶した後にも存続し、この地区の主要な排水溝であったと考えられる。



第3図 第104次調査区全景（北から）

D 期

発掘区の西よりの南北溝と、これに注ぎ込む玉石敷溝が作られており、この地区の計画的な排水施設が最も整った時期である。この南北溝の堆積土中から多量の土器、木簡等が出土した。これらの遺物は奈良時代後期の特色を示す。この時期の造構として掘立柱建物 6 棟、掘立柱塀 3 条、溝 9 条がある。

SB 8610 7間以上×3間の東廂付き南北棟掘立柱建物である。検出した29個の柱穴のうち20個の柱穴に柱根が残存していた。桁行10尺等間、梁行は身舎8尺等間、廂の出9尺。南は発掘区外に張り出しているため規模は不明である。この建物には、桁行に2間、1間の単位で間仕切りがある。

SB 8609 3間×2間の掘立柱南北棟である。南妻柱は未検出である。桁行8尺等間、梁行7尺等間。

SB 8612 SB 8610の北にあって4間×3間の西廂付き南北棟掘立柱建物である。桁行9尺等間、梁行7尺等間。

SB 8632 4間以上×3間の南廂付き東西棟掘立柱建物である。桁行10尺等間、梁行は廂の出10尺、身舎9尺等間である。この建物は東の発掘区外へ張り出しているため規模は不明である。

SB 8640 SB 8632の北へ6.5m間隔をおいて4間以上×3間の北廂付き東西棟掘立柱建物である。桁行10尺等間、梁行は廂の出が10尺、身舎部分が9尺等間である。SB 8632と西側柱の柱筋がそろって同規模の建物と思われるが、東の発掘区外へ張り出しているため不明である。

SB 8638 6間×2間の南北棟掘立柱建物である。桁行10尺等間。

SD 3236 この南北素握り溝は、第22次南調査によって確認された溝と一連のものであり、今回その南延長部分を約97m検出した。この溝には3期の区分が認められ、新しい順にA・B・Cとする。当初の溝 SD 3236 C が一番大きく溝幅2m深さが0.6mある。西岸においては一部細い丸杭を溝に沿って数条打ちこんだ護岸施設が検出された。この施設が西岸すべてにわたって設けられていたかどうかは不明である。この溝から出土した土器は平城宮V（780年頃）が主体である。

南北溝SD3236Bは、溝幅が大体Cと同規模であり、深さは0.5mである。この溝からは多量の須恵器、土師器が出土した。大部分が奈良時代末期の平城宮Vに属する。又、約60点の出土軒瓦は平城宮III期に属する。

溝 SD3236B廃絶後の溝 SD3236Aは、溝幅0.9m前後、深さ0.15mで当初の溝よりかなり小規模なものである。この溝から出土した土器も平城宮Vに属している。又、SD3236B・Cからは157点の木簡が出土した。そのうち年紀のあるものは、天平勝宝から宝亀6年まで8点あり、奈良時代後半のものである。

以上、南北溝SD3236は3時期の区分が認められるが、出土した土器、木簡からみて、それぞれあまり時期的な差ではなく、奈良時代後期の溝であると決定できる。

SD8620 発掘区中央よりやや北でSD3236と接する東西方向の石敷溝である。側石、底石とも残存しているところは、6.5mばかりである。溝幅は0.5mで、SD3236Bに合流する。側石をすえる為の掘形は、深さ0.4m程度である。

SD8629 SD8620のすぐ南側にあって、SD3236Bに合流する東西方向の素掘り溝である。SD8620よりは新しい溝である。

SX8666 SD8620やSD8629からSD3236に流れこむ際におきる浸蝕によって出来た攪乱部である。この部分の堆積土中から、宝亀五年の年紀のある木簡が出土している。

SD8624 SD3236に流れこむ東西方向の素掘り溝である。

SA8660 SB8610の西にある南北方向の掘立柱塀で2間分検出した。柱間5尺。

SA8617 SB8612の北側にある東西方向の掘立柱塀で4間分検出した。柱間寸法は西から10、10、9、8尺である。西から1間目と2間目の柱穴に柱根が残存していた。

SA8654 SA8617の北にある東西方向の掘立柱塀で2間分検出した。柱間9尺。

E 期

奈良時代の終末期にあたり、遺構もまばらとなる。建物規模は小さい。この時期の造構としては掘立柱建物3棟、掘立柱塀2条、溝13条、井戸1基、石敷面1箇所がある。

- SB8611 2間×1間の東西棟掘立柱建物で桁行は西から9、10尺、梁行10尺。
- SB8613 3間×3間の縦柱の建物である。東側柱の柱間は南から10、6、6尺、西側柱の柱間は南から5、5、6、6尺、南側柱の柱間は東から8、7、2、6尺、北側柱の柱間は東から8、5、2、8尺である。この建物の南・西・北には、それぞれ扉がつくものと思われる。柱穴掘形から平城宮VIIの土器が出土した。
- SB8637 2間以上×2間の掘立柱東西棟である。西の発掘区外へ張り出しているため建物規模は不明である。桁行8尺等間、梁行9尺等間。
- SA8663 やや東に偏位する南北方向の掘立柱跡である。3間分検出した。柱間は南から11、6、5、10尺である。
- SA8648 SD3236Aの東に位置する南北方向の掘立柱跡である。やや東に偏位する。3間分検出した。柱間は南から7、9、9尺である。
- SD8622 この溝は、南北方向の石敷溝である。側石が残っており、底石は当初から使用していないものと思われる。側石の大きさは0.2m前後で遺存状態はあまりよくない。溝幅は約0.3m、深さは0.1m程度である。
- SE8679 調査区の東北隅で検出した井戸である。その掘形は、東西幅3.3m、南北幅3.9mで、井戸枠は遺存せず、掘形の中央部1mの範囲で深さ0.7mあたりから、0.3m前後の安山岩が井戸枠をはずした後にはうりこまれた状態で検出された。又、この上部には、東西方向の一条のシガラミを検出したがその性格は不明である。この埋上から平城宮Vの土器が出土し、その廃絶は奈良時代終末期にあたる。
- SX8685 直径0.1m前後の石を平らに敷きつめた石敷面である。東西幅8m、南北幅は広いところで2.5mある。遺構の性格は不明である。

F 期

奈良時代終末期の遺構を全面バラスで覆った時期である。この時期の遺構は検出できなかった。バラス敷の厚さは一様でなく厚いところで0.1m、薄い所で0.05m程度である。発掘区の中央より約3m西によったところは、バラス上面のレベルが周辺より0.2m前後溝状に落ちこんでいる。このバラスを排除した後の遺構面のレベルも同じように低い。このことは南北溝SD3236と何かの関連があるものと思

われるが定かでない。このバラス面からは、平城宮V～VII、少量ではあるが中世の青磁、瓦器、灰釉陶器が出土した。従って、バラスによる整地は奈良時代末期以後、9世紀に入ってからの工事と考えられる。このバラス敷の遺構としての性格は不明である。

2 遺 物

今回の調査では、300点を越す木簡、600点を越す軒瓦、平箱で200ケースを越す土器類をはじめとして多量の木製品、金属器が出土した。特にSD6800の斜行溝、SD3236B・Cの南北溝から出土した木簡や土器類は、平城宮の東への拡張時期を考察する上でこの上ない貴重な資料である。

木簡類 木簡の出土総点数は319点であり、出土場所はA期の斜行溝SD8600D期の南北溝SD3236B・C、及びその他の地域に大別できる。斜行溝から出土した木簡は、堆積土、埋め土を含めて129点あり、そのうち9点に年紀があり、いずれも和銅年間のものである。内容的には貢進付札が多く、中でも鍵の貢進付札が5点あるのが注目される。造営に伴なう材料を示す文書木簡もある。また、これらは奈良時代初期木簡の一括大量出土例として貴重である。

斜行溝からは「十廷和銅七年十月□」、(表)「丹波國多紀郡真継里」(裏)「多紀臣大足三斗并一俵和銅五年」、(表)「備後國□」、(裏)「万□里鍬十口」等がある。

南北溝SD3236B・Cからは155点出土し、年紀のあるものは天平勝宝から宝亀6年まで8点ある。いずれも奈良時代後半のものである。内容的には造営に関するものとみられるものの他に、造勅旨省司や春宮の舍人監などの官司名が出ていている。その他からは35点出土しているが、そのうち長方形土壙SK8630から出土したもので、和銅、靈龜の年紀をもつ内侍名を記した木簡が注目される。また、B期の掘立柱建物SB8580の抜き取り穴の埋土から出土した木簡は、天平十□年の年紀をもつものであり、この建物の廃絶時期を知る大きな手がかりとなった。

瓦埠類 軒瓦の出土総数は653点であり、そのうち軒丸瓦309点、軒平瓦344点を数える。軒丸瓦には、21型式32種あるが、6282型式が圧倒的に多い。軒平瓦

は16型式30種あるが、そのうち6721型式が大多数を占めている。いずれもⅢ期の瓦である。この6282と6721は東院西辺部で主要な組み合わせである。このことから、Ⅲ期（745年頃～756年頃）にこの地区で大造営が行なわれたと考えられる。主要な出土品は、小型縁軸埠、縁軸平瓦片、刻印瓦（「真依」・「中臣」・「宗我乙」や「神人」……）、鬼瓦（完形2、破片1）がある。

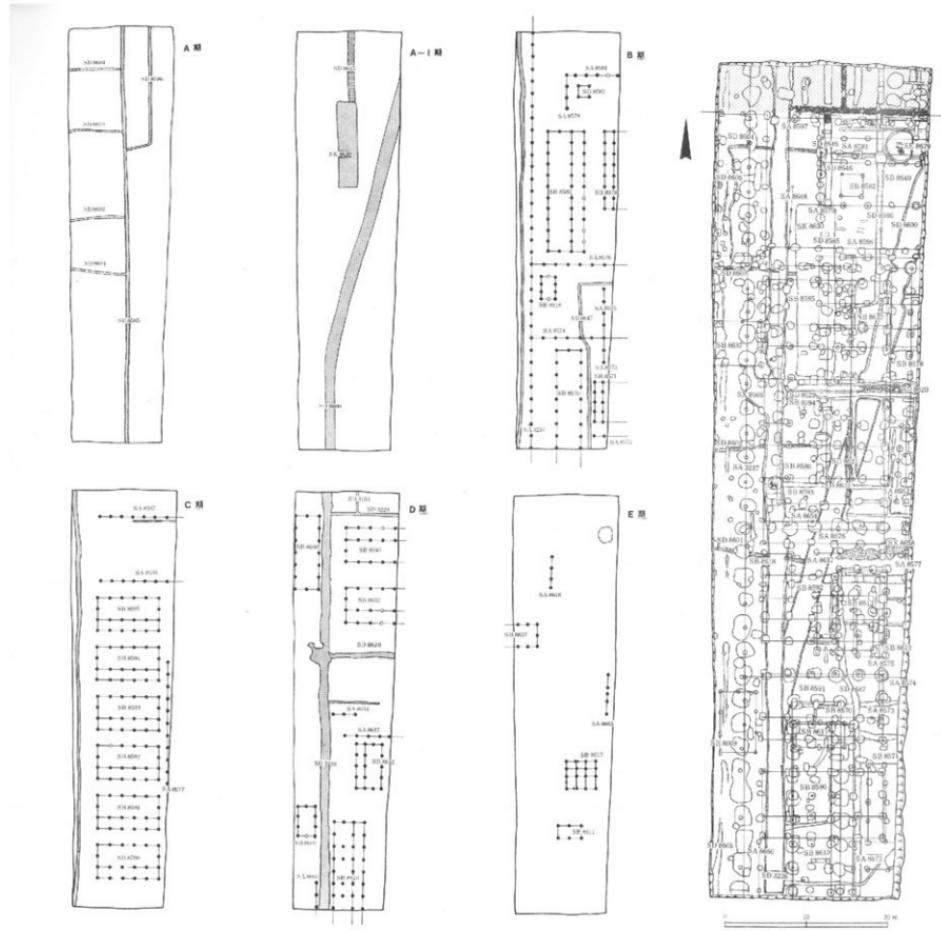
土器類 須恵器、土師器の出土量は平箱で213ケースに達した。特にA期の斜行溝SD8600、D期の南北溝SD3236B・Cからは豊富な資料が得られた。斜行溝からは多種多様な器種が見られ、わずかに古墳時代の須恵器、埴輪が含まれている他は、平城宮I・IIの型式に属し、奈良時代前期のものである。この堆積土中からは、唐草文を範書きした須恵器の蓋、同様な唐草文を描いた鏡形杯の小片、11点の墨書き土器が出土した。

南北溝SD3236B・Cからは、奈良時代末期の平城宮Vに属する土器が多量に出土した。墨書き土器175点、線刻のある土器18点が出土した。主要な物として、二彩の鉄鉢の破片が9点、黒漆を塗り重ねた土師器1点、土馬1点が出土した。

木製品・金属器 木製品の大量出土場所は斜行溝SD8600と南北溝SD3236で曲物類が多く、櫛、糸巻、木皿、琴柱等が出土した。金属器では、菅玉、飾丸鉢、磁石、銅鉢、銅線、金箔片、鉄釘、刀子、鉄鎌、和同開珎等が出土した。

ま と め

今回の調査によって、東院の西辺における遺構の変遷過程を撮むことができた。東一坊大路に相当する個所で奈良時代初期の斜行溝や長方形土壙を検出したこと、さらに東一坊大路の西側溝とみられたSD3236が奈良時代後期に下る新知見とを併せると、当該地区が奈良時代の当初から平城宮の一部であり、何らかの官衙地域であった可能性は強い。また『統日本紀』によるとの門から北進したところに太政官弁官曹司の南門が設けられたいことが判るが、今回の調査では門とみられる遺構は検出されなかった。このことについては今後の検討と周辺の発掘調査にまちたい。



第4図 第104次調査造構図

III 宮跡内その他の発掘調査

① 佐伯門東方の調査（第106次）

調査は、25次調査において佐伯門の東で検出され、一部整備復原されている宮内道路を第一次朝堂地区まで延長整備する計画に先立って、延長部の確認を目的として行った。調査地は、佐伯門の東方約230mの地点（6ACD-I・6ACQ-C・6ACE-G・6ACR-A）にあたり、約750m²を発掘した。6ACQの一部は、昭和51年夏、埋蔵文化財センターの研修発掘区と重複する。

調査は、7月1日から同月30日に終了した。以下、調査地区を南北に分断する用水路を境にして、北半部（6ACQ・6ACD）と南半部（6ACR・6ACE）に分けて報告する。

1 遺構

北半部には、整地土は見られず、遺構はすべて地山面で検出した。地山面は、北西部が高く、東・北に向って下降している。検出した奈良時代の遺構は、東西溝3条（SD8810・SD8820・SD8844）・南北溝（SD8830）・掘立柱建物（SD8800）・折敷埋置施設（SX8845）である。

SD8844の東半部は、中世の井戸・近世の井戸で分断されているが、断面梯形状の素掘りの溝で、東に向って流れる。最大幅1.1m、深さ約0.25mを測る。SD8820は、佐伯門の中軸線に沿って東に流れる。最大幅2.45m、深さ約0.3mを測る。SD8810は削平が著しく、途中で止切れるが、溝底レベルは西に低い。検出した長さは短かく、どちらに流れているかは斯言できない。SD8830は、SD8820に合流する。南延長部は土壤で切られ、SD8844との関係は認めなかったが、南トレンチで検出されなかった事より、おそらく、SD8844とも接続するものと思われる。SB8800は、3×2間以上の東西棟で、いずれの掘方にも柱痕跡があり、それにより柱間を復原すれば、梁行10尺、桁行8尺となる。SX8845は、SD8820の溝底から検出されたが、小さな土壤内に、底に瓦片を敷き、側面に平瓦と面戸瓦を置き、折敷を固定した施設である。

南半部は整地土がかなり残っていたが、近世の水溜などでかなり搅乱されていた。検出した奈良時代の遺構は、SX8843だけであり、SX8843は、断面V字状に掘り込んだ溝状遺構で、H字状のプランで連接していた。掘り込みは地山面から行われ、東掘方は整地土で被っていた。数ヶ所、断ち割りを行ったが、遺物は皆無で、版築のような整然とした層序ではないが、粘土と砂質土の薄い層が互層をなしていた。SX8843の性格については不明である。

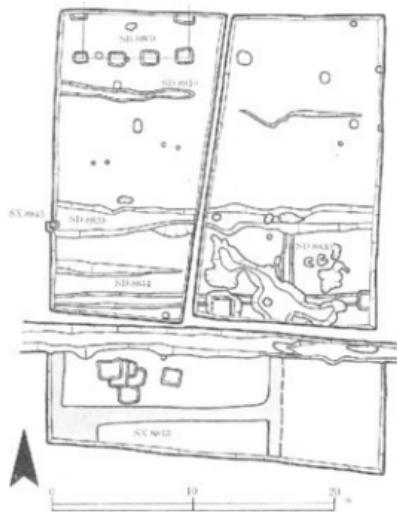
2 出土遺物

木製品としては、SX8820の置敷1点と円板状木製品の破片4個がSD8820から出土した。南半部上塙からは、中世以降の手桶が1点出土している。土器類は平箱3ばい程出土した。SD8820・8844出土の土器はⅢ～Vに編年される。軒丸瓦は、4型式5種（6233・6284・6225・6282）と不明の1点を含め、総数6点、軒平瓦は、6型式（6641・6642・6667・6681・6711・6714）と不明1点あわせて8点が出土した。面戸瓦は4点あり、いずれも、蟹面戸で藤原宮式の特徴を備えている。

3まとめ

発掘区の北と南では、様相が異なり、両地区の関連は水路で分断され、調査面積が狭いことと相俟って、把握できなかった。しかし、SD8844とSD8820の間は、周辺に較べ、地山面が高く、ここに築地を想定すれば、両地域の様相の異なる点は、官衙ブロックの差として説明する事ができよう。今回の調査では、築地遺構の積極的な証左を検出しなかったので、あえて築地として遺構番号を付けなかった事を付記したい。

今回の調査では、道路敷らしい遺構は検出されなかった。道路敷想定部の中軸線に沿ってSD8820が流れていて、出土遺物より奈良後半頃まで存続するという知見が得られた。



第5図 第106次調査遺構図

② 佐紀池東地区の調査（第103-9次、第107次）

佐紀池の東方で第103-9次、第107次の発掘調査を実施した。第107次の発掘調査は6ABN-W、6ACA-G、6ACB-A・B区で昭和52年11月24日から同年12月27日まで、第103-9次の発掘調査は6ACA-N区で昭和53年1月9日から同年2月8日まで行なった。発掘面積は第107次が $1,130\text{ m}^2$ 、第103-9次が 900 m^2 である（第6図）。

1 遺構

6ABN-W区と6ACB-A区で奈良時代の掘立柱建物1棟、溝1条、土壙9基を検出した。それ以外の地区は近・現代の搅乱による破壊がおよび、奈良時代の遺構はない。6ABN-W区では自然層が東北から西南に向って傾斜し、これに沿って整地土が斜めに堆積する。整地土は、含有機質灰色土の上に黄色粘質土、含礫暗灰色粘質土、含礫黄色粘質土、黄色砂質土の順で堆積する。しかしトレンチの北半部には整地上はない。床土の下は自然層である。



第6図 第103-9, 107次調査位置図

含疊暗灰色粘質土上面で掘立柱建物 SB8851を検出した。桁行5間、梁行4間の東西廂をもつ南北棟。柱間寸法は桁行が3m(10尺)、梁行が2.25m(7.5尺)である。東廂の出は、3m(10尺)。西廂の出は、2.4m(8尺)と推定。

トレンチの南端で東西溝SD8850を検出した。SD8850の南の肩はトレンチの南に延びるものと推定。黄色砂質土の上面で検出し、溝の内部からは第Ⅲ期の軒瓦が出土した。大膳職の北を画す溝とみられる。

トレンチの隨所で土壤を検出した。円形の1例を除いて、土壤の掘形は不整形である。壙底は凹凸が著しい。

6ACB-A区のトレンチ南半で奈良時代の整地土と上壙1を検出した。6ABN-W区同様、自然崩が南に向って傾斜し、整地上はわずかしか残っていない。

6ACA-N区は周囲より比高で1.5m程地形が高く、奈良時代の遺構の検出が期待できた。しかし近・現代の溝状遺構が大規模にわたって、この地区を破壊しており、奈良時代の遺構を検出することはなかった。6ACA-G、6ACB-B区も搅乱による破壊によって、奈良時代の遺構を検出することはなかった。

2 遺 物

瓦類、土器類が出土した。SD8850から第Ⅲ期の軒瓦が出土したほか、6ACB-A区の整地土からも第Ⅰ期の瓦類が出土した。前者は、軒丸瓦6282が2点、軒平瓦6721が4点、6684Cが1点である。

出土された器類に完品ではなく、いずれも小片である。そのうちに蹄脚硯1点がある。脚台部の径28.5cmの大型品で、外面に自然釉がかかる。硯部と脚台部を一連で形成する蹄脚硯Bに属し、蹄脚硯のなかでは新しい型式のものである。

3 まとめ

佐紀池の東岸に接する地区は奈良時代以降に地形の変化をこうむっており、概して奈良時代の遺構の遺存は悪い。一方、SD8850は大膳職の北を画す溝とみられ、それより北側に遺構の存在が明らかとなった。とりわけ掘立柱建物SB8851を検出したことは、宮の北辺地域の性格をきわめてゆく上で、ひとつの手がかりとなろう。

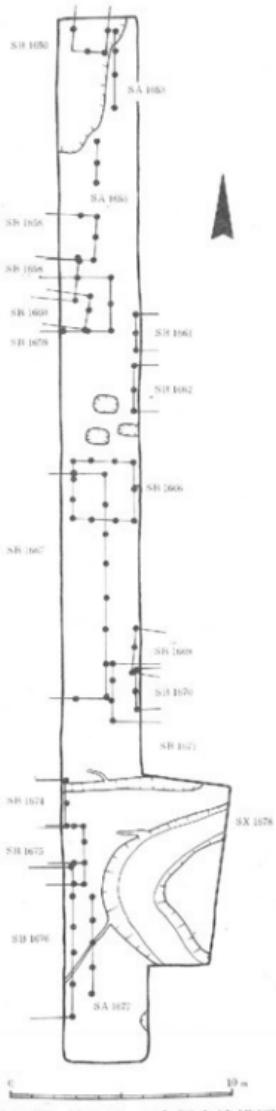
IV 平城京の調査

① 左京三条二坊七坪の調査（第103-1次）

今回の発掘は奈良市北新町109の1、111の2、112の1、にまたがる明新社用地内の駐車場建設に伴う事前調査である。発掘区は左京三条二坊七坪にあたり、その南には三条条間路をはさんで昨年発掘した庭園遺構（特別史跡・平城京左京三条二坊宮跡庭園）がある。調査は七坪のはば中央に南北トレンチ（91×8m）を設定し、1977年5月9日から同年6月2日まで実施した。発掘面積は約900m²である。

遺構

調査の結果、建物15棟、塀3条、土壙4溝2条、旧河川を検出した。トレンチ調査のため、建物配置は明確でないが東西棟12棟、南北棟3棟である。うち一部規模の判明するものは、桁行五間と桁行七間の南北棟(SB1667・SB1676)、三間×三間の東西棟SB1666のみである。前者のSB1667・SB1676の南北棟建物をのぞいて、他は柱掘形が小さく(50~30cm四方)、柱間もいずれも10尺にみたない小規模な建物群とみられる。径10cmほどの柱痕の残るものもある。建物には重複関係や方位の異なるものがあり、2時期以上の変遷が考えられる。トレンチの南で検出した旧河川SX1678は蘆川の流路とみられるもので、北東から南東に大きく蛇行する部分を検出した。堆積土中から8世紀前半期の土器や、多くの木片や削り屑とともに「八田須支九口受□」

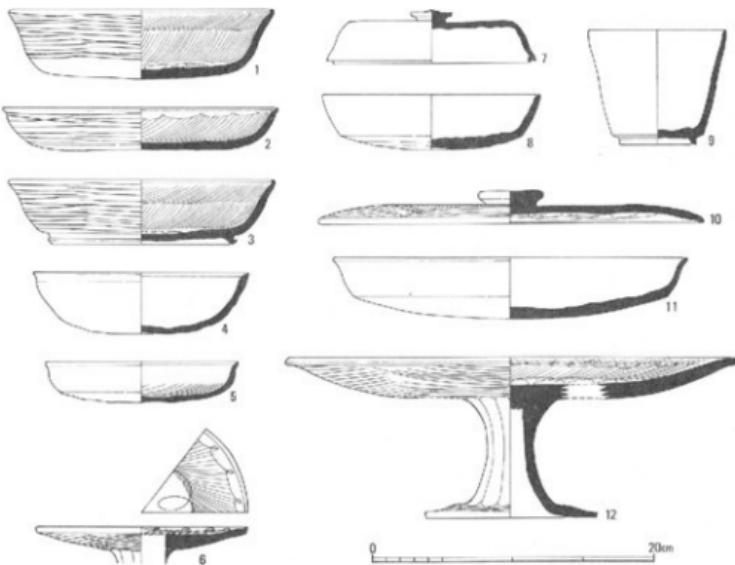


第7図 第103-1次調査遺構図

守石村」と記した木簡 1 点が出土した。なお、奈良時代の河床パラス層から弥生時代や古墳時代の上器が出土し、さらに一時期古い河川が存在する。この河川が埋められ整地されるのは、埋土から出土した土器によって 8 世紀の中頃とみられる。この河川は六坪の園池の導水路と関連すると思われる。

遺物

遺物は全体に少ない。土器類は旧河川出土の 8 世紀前半の土器と遺構面をおおう包含層から出土した 8 世紀末から平安時代初頭にかけての土器が主なものである。なお、包含層出土の土器によって平安時代初頭に遺構が廃絶されることが判明した。瓦類は平城宮出土と同范のものが多く、藤原宮式も若干混る。こうした出土傾向は六坪の庭園と共通している。他に前述の木簡 1 点が出土した。



第 8 図 第 103 - 1 次調査出土土器 (1 ~ 6 + 10 + 12 土師器、7 ~ 9 + 11 須恵器)

② 左京四条三坊一坪の調査（第 105 次）

調査地は佐保川の西岸、三条通りの南に接する奈良市塵芥処理場の跡地で、平城京の復原条坊地割では左京四条三坊一坪にあたる。奈良市の依頼をうけて当研究所が調査を担当した。発掘面積は約 550 m²である。

調査地には、すでに奈良市による造成工事が行なわれており、旧水田面上には塵芥を主体とする厚さ約 2 m の盛土があった。盛土以下は上層から順に耕土・床土（0.4 m）、黄灰色細砂層（0.5 m）、青灰色粘土層（0.8 ~ 1.0 m）が堆積し、さらにこの堆積の下層に、奈良時代から中世までの遺物を含む、厚さ約 0.2 m の暗灰色砂質土がひろがる。遺構は、主としてこの遺物包含層を取り除いてあらわれる茶褐色砂質土上面で検出した。茶褐色砂質土は奈良時代の整地土である。また一部の遺構は、この整地土の下層、暗灰色砂あるいは黄灰色砂の地山面上で検出した。

遺構

発掘区の位置は、一坪の西南部にあたる。検出したおもな遺構には、掘立柱建物 5 棟、塀 1 条、素掘りの溝 3 条があり、ほかに性格不明の小土壤や小柱穴がある。また発掘区西辺で検出した南北方向の大溝 SD11 は、出土遺物、土層の堆積状況からみて、中世の河床であった可能性が強く、中世以降の水田耕作に関連するらしい東西方向の溝も全域にわたって検出している。

なお東二坊大路の東側溝を検出するべくトレンチを設けたが、この範囲で明確な遺構を検出できなかった。

建物は SB08 を除いてすべて奈良時代に属すと考えられるが、どの建物も発掘区の縁近くで検出されたため、全体の規模を明らかにし得ない。棟方向の判明したものに、東西棟 2 棟 SB03、SB08、南北棟 1 棟 SB07 があり、このうち SB03 は南廂をもつ建物である。

溝には東西方向の溝 SD06、南北方向の溝 SD04、建物にそって屈曲する溝 1 条 SD09 がある。

これらの遺構には重複関係があり、建設の時期を大きく二つに分けることがで

きる。すなわち最初は建物 2 棟 SB07・SB10、これにそう雨落溝 SD09、および掘 SA02 がつくられる。次の時期には SA02 は取毀され、SB01 と SB03 が南北に柱筋をそろえて建てられる。両建物の西側にそって SD04、北側に SD06 が掘られる。このときに SB10 は廃絶するが、SD06 が SB07 の南妻をよけるようにして掘られているので、SB07 はこの時期にも存続する可能性がある。

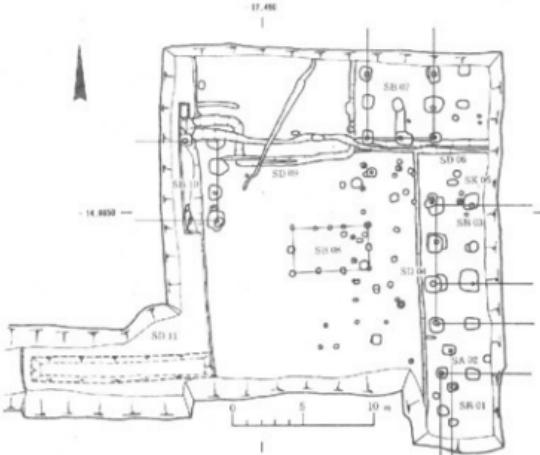
遺 物

遺物の多くは遺物包含層から出土した。奈良時代のものでは土師器、須恵器が多く、瓦片は少ない。軒瓦は皆無であった。ほかに「和同開珎」銅錢 1 枚が出土している。特殊な遺物としては SB07 西南隅柱穴の柱痕跡から出土した径 1 cm ほどの水晶玉がある。また、中世の遺物であるが、羽釜や、SD11 から出土した柿経、板塔婆、漆椀などの木製品がある。漆椀の底には、「宝幢寺」の銘が記されていた。「宝幢寺」の由緒については不明である。

まとめ

限られた発掘区でもあり、また遺跡地周辺は、佐保川の氾濫などによるものか、地上における条坊痕跡の

遺存が悪く、宅地割や各遺構の条坊内における位置づけなど、多くの課題を残した。しかし今回の調査により、平城京時代の遺構の存在が確かめられた意義は大きく、今後の調査のいかんによっては、上記の問題について検討できる可能性が大きくひらかれたといえよう。



第 9 図 第 105 次調査遺構図

③ 左京三条二坊六坪の調査

第109次調査区は、昭和50年の第96次発掘区の北西に接続し、六坪の中心にある園池の北側を走る東西塀から三条条間路（現大宮通り）までの区域である。

遺構

調査区はもと水田で、奈良時代遺構面までは約20～30cmと浅い。遺構面は北半では黄灰色砂質土であるが、南半では茶褐色粘土で、その下は黄色粘質土、さらに黒色粘土層となり、かつて低湿地であったことがうかがえる。検出した柱穴の深さからみると、奈良時代地表面は現在より50cmほど高かったと推定される。

検出遺構は掘立柱建物5棟、溝2条、井戸2基、土壙などである。これらの遺構は、前回の調査結果と合わせて3期に区分できる。

A-1期 堀立柱建物4棟、井戸2基がある。

建物SB1570は調査区中央にある身舎桁行5間、梁行2間で南北廂をもつ東西棟である。柱間寸法は9尺等間。身舎南側柱列西第3柱穴には径32cmで、面取りのある柱根が残存していた。身舎の柱掘形が1辺1～1.3mであるのに比して、廂の柱掘形は0.8～1mと小さい。廂東第2柱穴には柱根と礎板が残っていた。柱穴検出面と礎板との高低差は26cmと極めて浅い。

建物SB1571はSB1570の西6mに柱通りを揃えて並ぶ東側柱列のみを検出した。SB1570と同規模の東西棟と考えられる。

建物SB1573はSB1570の東南にある南北棟で、西側柱列をSB1570の東側柱列とはほぼ揃える。桁行5間、梁行2間で、柱間寸法は桁行8尺5寸、梁行7尺である。柱掘形は一辺0.5mと小さい。北西隅柱穴には柱根が残る。

建物SB1552-Aは、SB1570の北東にある東西棟で、前回調査に続き新たに2間分検出した。南側柱列をSB1570の北側柱列と、西側柱列をSB1573の東側柱列と揃える。桁行6間以上、梁行2間で、柱間寸法は10尺等間である。

溝SD1545は前回調査に続き、調査区北端で検出した素掘の東西溝である。六坪と三条条間路とを画する築地の南側雨落溝と考えられる。

井戸SE1610は掘形が径約1.5mの不整円形で、深さは0.6m、底面近くに方形の

側板痕跡を残す。

井戸SE 1611はSE 1610の北西にあり、径約2mの不整円形で素掘りである。深さは0.5m。埋土からⅢ期の土器類が出土している。

A-2期 SB 1573が焼絶し、SB 1552を建て替える。

建物SB 1552-Bは西から4間目で間仕切り、内部に棚状の施設をもつ。内部の柱穴は径約0.5mで、側柱から3尺離れて、南北3間、東西2間並び、北側1間分はさらに東へ5間分のびる。

B期 これまでの建物・井戸を廃絶し、SB 1574を作る。

建物SB 1574は桁行5間以上、梁行2間で柱間寸法10尺等間の東西棟である。前回調査の礎石建物SB 1540と柱通りを揃える。南側柱列東第5柱抜取穴からは平城宮出土瓦編年でⅣ期（天平宝字元年～神護景雲年間）の軒丸瓦が出土しておりB期の年代を推定することができる。

遺物

出土した遺物には、瓦類、土器類、石製品がある。

瓦類には、多量の丸瓦、平瓦の他、軒瓦24点（軒丸瓦12点・軒平瓦12点）、面戸瓦1点がある。軒瓦は藤原宮式を含めI～IV期までみられ、平城宮出土瓦と同范のものである。量的には軒丸瓦6285型式、軒平瓦6667型式を中心とするII期（養老5～天平17）のものが多い。

土器類には、上師器皿・高杯・甕、須恵器皿・杯・高杯・盤・火舍・鉢・擂鉢壺などがある。SD 1545からは奈良時代前半期のものが多く、土馬の尾部も出土している。

石製品は、SD 1545から出土した。将棋駒形をなし、頂部に径0.6cmの円孔がある。中央部幅14.7cm、長さ19.6cm、重さ2296gである。

まとめ

前回調査と合わせて、六坪の約35%が調査された。未発掘部分が多いため、六坪の全体的な構成・性格については十分に把握しがたいが、今までの調査で明らかになった坪内の利用状況は次のようである。

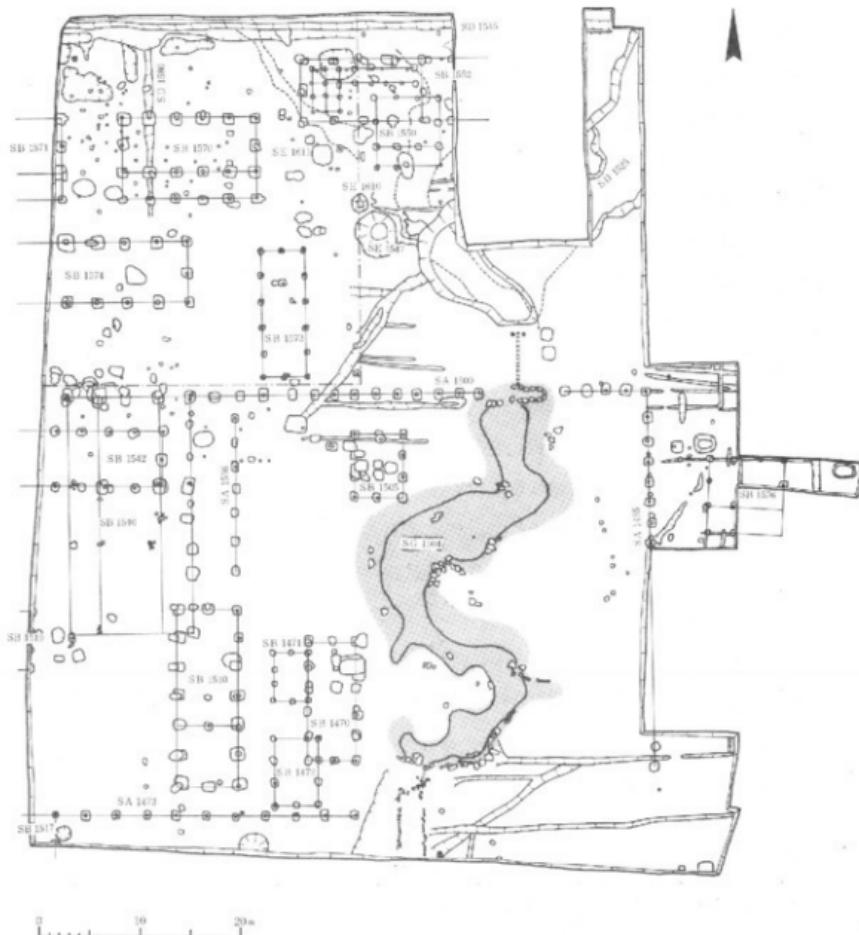
A-1期 坪の中心に園池SG1504が作られ、これらを囲む塀SA1500、SA1473、SA1483により、坪は南北に140尺で三等分される。今これを南区・中区・北区と呼ぶと、建物は、中区ではSB1510、SB1542、北区ではSB1570、SB1571、SB1573、SB1552-Aがある。建物・塀の配置は、坪中心からの距離が10尺単位の数値で割り付けられる。この時期はSG1504への導水路SD1525出土の「和銅五年」「和銅七年」の木簡により、平城京造営当初におかれる。

A-2期 東西塀SA1500が東に柱間7尺で延長され、中区と北区とが明確に区画される。中区ではSB1505、SB1470が坪中心より7尺で割れる位置に新築され、北区ではSB1552が建て替えられて、内部に棚状の施設が作られる。

B期 大規模な改作が行われる。SA1500が存続し、北区と中区は依然区分されている。中区、北区とも、これまでの建物が廃絶し、中区では西側に礎石建物SB1540がつくられ、その東にSB1471、SB1472、園池の東にSB1476が配される。北区ではSB1574がSB1540と柱通りを揃えて作られ、東北にSB1550が位置する。これらの建物配置は坪中心から7尺単位の数値で割り付けられている。SB1574の柱抜取穴出土の軒丸瓦により、この時期は奈良時代後半にあたる。

このように各時期の建物配置をみると、未調査の南区は不明であるが、中区・北区では軌を一にした建て替えがなされ、両者の密接な関係がうかがえる。また、六坪の利用にあたっては、当初140尺を単位とする大きな区画割りを行い、細部の建物配置はA-1期では10尺、A-2期・B期では7尺を単位とした割り付けを行っていることが推定される。

今回検出した建物群は、園池の北側の区画にあたり、六坪の利用状況が一層明らかになった。園池を中心とする中区が、公的な宴遊の施設と考えられるのに対して、塀SA1500以北の北区の性格は、六坪所有者の家政機関に係るものと思われ、園池の管理・運営が行なわれていたとみられる。また今回の調査により、西側の民有地へ遺構がひろがっていることが明らかになった。



第10図 第109次調査構造図

④ 西一坊大路の調査（第103－8、14次）

奈良県净化センター施行の下水道管渠発進坑工事にともなう発掘調査を4ヶ所の工区において行った。

1) 第27工区（第103－8次）

奈良市尼ヶ辻町の県道木津郡山線の東に接する部分に南北6.5m、東西4.0mの発掘区を設定した。調査地は平城京右京四条一坊十三坪に西接する西一坊大路の存在が推定されるところである。現道路面より1.5mで黄色粘質土、その下に灰褐色粘質土、さらに黄褐色粘質土が堆積し、道路面から2.2mで地山の黄灰色粘土となる。地山面は南へ若干傾斜している。検出した遺構は溝1、土壙3、柱穴3であり、柱穴1の他は全て地山面で検出した。発掘区中央南半部で検出した土壙は東西幅1.0m、深さ0.3～0.4mで、発掘区の南に延びている。この土壙からは瓦、土器が出土した。土壙内下層からは奈良時代の多量の丸瓦、平瓦片と、8世紀のものと思われる四耳付薬壺が出土し、上層からは磨滅した11～12世紀の瓦器片が出土している。土壙の東側に南北方向の溝がある。柱穴は調査区内ではまとまらない。

2) 第28工区（第103－14次）

平城宮西南隅の南約80mの県道木津郡山線道路敷部分と、それに西接する水田上に南北6.0m、東西16.0mの発掘区を設定した。平城京右京三条二坊一坪に相当する場所である。水田面から1.0mで遺構面に達し、その上には河川の氾濫によると思われる5～6層の砂、粘土、砂質土が堆積しており、下位の層からは瓦器の細片が、上位の層からは近世の陶磁器片がわずかに出土している。この堆積土中には鉛滓の小塊が目立った。発掘区遺構面の東半部には深さ2.5m以上の自然流路と思われる大溝が北北西から南南東に流れている。溝中には粗砂および粘土が堆積しており、ごくわずかの磨滅した瓦器片、中世の羽釜片が出土した。この大溝は発掘区のさらに東に拡がっている。西半部には小土壙5を検出したが、まとまりはみられず性格は明らかでない。

3) 第29・30工区（第103－14次）

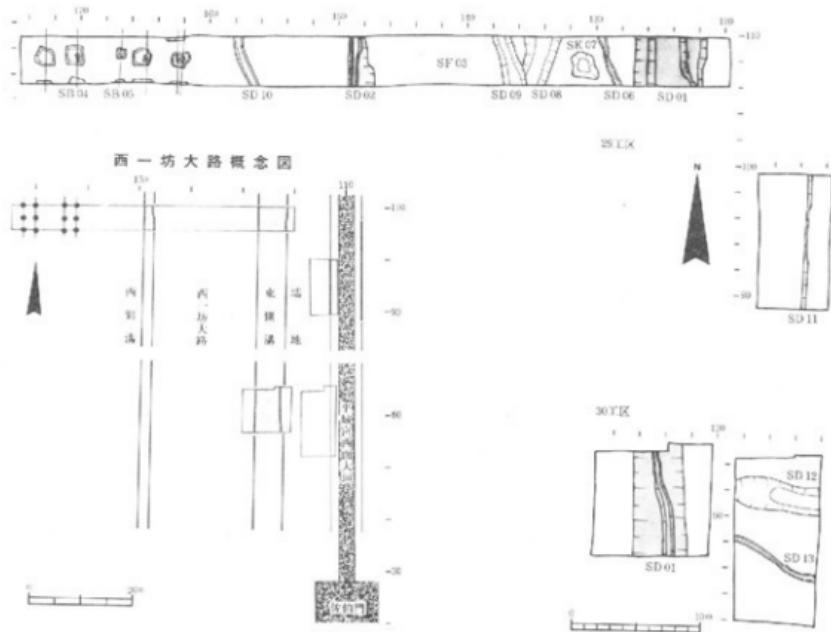
平城宮西面大垣に接する西側の部分に4ヶ所の発掘区を設定した。宮西面中門

(佐伯門) の北方40～100mの県道木津郡山線の道路敷とその西側の水田部分で、西一坊大路および宮西面大垣の西側の壠地の存在が予測された。水田面から約0.6mで遺構面に達し、水田耕土、床土の下には1～2層の砂質土あるいは粘質土が0.1～0.3mの厚さで堆積しており、古墳時代前期～近世の土器片を若干含んでいた。遺構面は暗褐色粘質土で、場所によってはその上に黄灰色砂質土が堆積して遺構面となっている。この黄灰色砂質土の層中には古墳時代前期の土器が含まれる。

検出した主な遺構は溝7条、礎石建物1棟、掘立柱建物1棟、土壙1基などである。南北溝SD01は幅3.8～5.6m、深さ0.5～0.8mで、粘土、砂が互層に堆積している。埋土上層からは8世紀後半の須恵器壺、杯が出土し、中層からは須恵器片の他、第II期の軒丸瓦6308型式と第III期の軒丸瓦6316型式が各1点、それに平瓦片が出土した。南北溝SD02は幅1.5～2.0m、深さ0.2mで埋土は砂質土である。溝中からは8世紀後半の須恵器杯が出土した。斜行溝SD06、SD10および土壙SK07からは二重口縁をもつ壺、甕、高杯、器台、鉢など、古い様相を呈する布留式土器が出土しており、古墳時代前期の遺構である。南北溝SD08、SD09、東西溝SD12、SD13はともに平安時代以降のものである。礎石建物SD04は梁行18尺(天平尺)、東西に8尺の廂をもつ南北棟である。礎石はいずれも残っていない。SB04よりも新しい掘立柱建物SB05は梁行16尺の南北棟で、北でやや東に振れている。これら2棟の建物は西一坊大路の西に接する右京一条二坊四坪内に位置する。

SF03は20.2～20.8mの東西幅をもつ西一坊大路の路面部分に当たる。東側溝SD01と西側溝SD02との溝心心距離はほぼ24.0mであり、80尺(8丈)の大路幅員が想定される。また東西両側溝の中間点すなわち西一坊大路の中軸線と、平城宮第16次調査で確認されている朱雀門の中心(平城宮の中軸線)との東西距離=532.37mであり、平城宮第32次および第39次調査すでに明らかにされている東一坊大路中軸線と朱雀門心との東西距離532.78m(0.296m×1800尺)とほぼ一致している。宮大垣に接する部分での東一坊大路と今回確認した西一坊大路との状況を比較すると、東西両側溝間心心距離が80尺(8丈)であること、宮域に近い側の側溝の規模がより大きいこと、大路と宮大垣との間の壠地の幅が約10mであること、

以上の点については共通している。しかし、東一坊大路西側溝の幅8尺に対して西一坊大路東側溝の幅は約18尺と、2倍の広さであり、西一坊大路西側溝の幅も約6尺で、東一坊大路の東側溝幅4尺よりも広い。なお、南北溝SD11は幅0.1～0.4m、深さ0.1mの浅い細溝で遺物は含まれていないが、平城宮第59次調査で検出した宮西面大垣の東側の雨落溝SD6303とは大垣推定中軸線を中心に対称的位置にあり、この溝が西側の雨落溝であることも考えられる。しかし未だ確証するに至っておらず、今後の検討をまちたい。



第11図 第103－14次調査遺構図

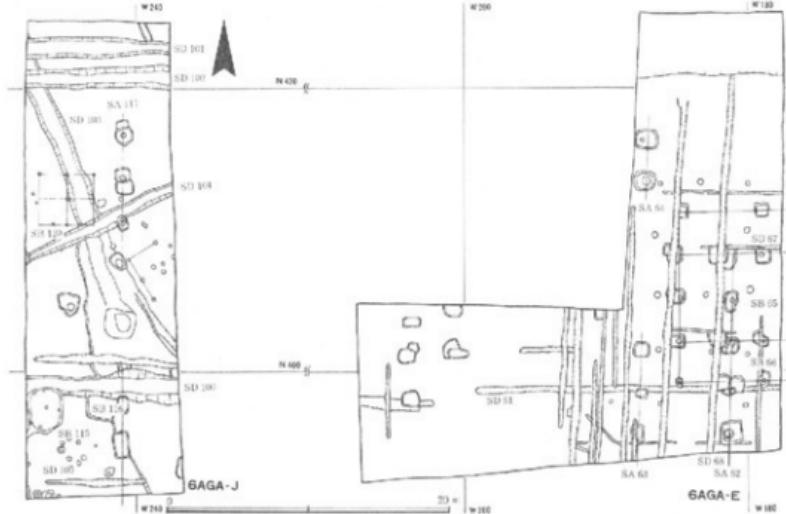
⑥ 右京一条二坊の調査（第103-7次）

奈良市二条町一丁目地内で、昭和52年10月18日から同年11月10日まで、103-7次発掘調査を実施した。平城京右京一条二坊一坪・二坪に相当する地点で、坪境い小路の検出を調査の目的とした（第12図）。

東トレント（6AGA-E区）では、奈良時代の東西棟掘立柱建物 SB65・SB66、南北方向の掘立柱塀SA62・SA63・SA64、溝SD61・SD67・SD68などを検出した。うちSA63は、SA62もしくはSA64と関連する一連の遺構である可能性が高い。掘形の重複関係から、SD61→SA62→SB65→SD67→SB66→SD68の順で変遷する。

西トレント（6AGA-J区）では、奈良時代の南北方向の掘立柱の塀SA111、東西方向の溝SD100・SD101・SD102・SD105などを検出した。その他に古墳時代の住居址SB115、溝SD103・SD104なども検出した。

奈良時代の遺構の重複状況は稀薄で、坪境い小路の幅員を2丈とすれば、SD100とSD105が小路の南北側溝である可能性がある。



第12図 第103-7次調査遺構図

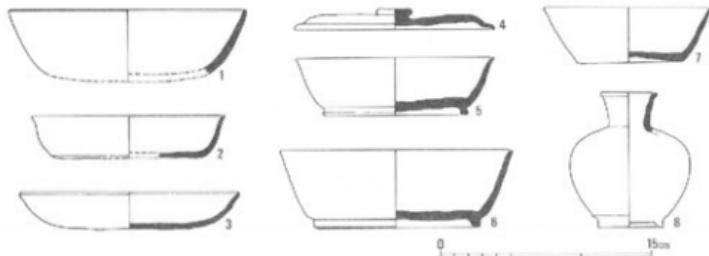
⑥ 北辺坊の調査（第103－16次）

調査地は平城京北辺坊のほぼ東南隅にあたり、北京極大路の存在も予想された。検出した主な遺構は建物8・柵7・井戸2・溝7である。これらはほとんどが奈良時代のもので、大きく3時期に区分できる。

1期の遺構 南廂の付く東西棟建物SB14（7間×3間）の脇に、東廂の付く南北棟建物SB17（1間以上×3間）と南北棟建物SB10A（2間以上×2間）があり、SB10Aの北には南北柵SA12A（1間分検出）がある。これらの東方は南北柵SA06A（5間）、南方は東西溝SD04（幅0.6m）によって画される。SD04以南には遺構がない。斜行溝SD05は奈良時代以前に遡る。

2期の遺構 SD04はこの時期まで存続。SD04以南に遺構はない。SD04以北は、南北溝SD16（幅2.8m）とSD18（幅0.5m）を側溝とする道路によって東西に2分される。東の区域には東西棟建物SB07（3間以上×2間）と南北棟建物SB10B（3間以上×2間）があり、SB10Bの西には南北柵SA13（2間分検出）、北西にはSB14の廃絶後に設けられた方形の井戸SE15（内法1.3m）がある。東方には南北柵SA06B（5間）がある。西の区域には方形の井戸SE19（内法1.8m）がある。この時期には、SB10Bが総柱の建物SB11（1間以上×2間）に、SA12AがSA12B（1間分検出）にかわり、南には南北柵SA09（2間分検出）が建つ。

3期の遺構 南北棟建物SB08（4間×2間）、東西棟建物SB21（3間×1間以上）があり、SB21の南には時期のやや遡る東西柵SD20（4間分検出）がある。調査区

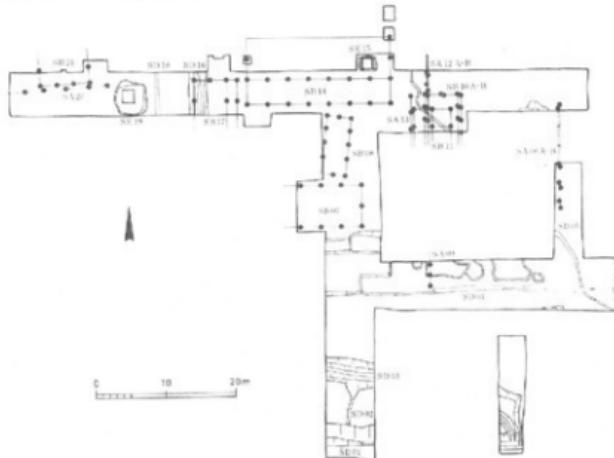


第13図 第103－16次井戸SE19出土土器（1～3 土師器、4～8 須恵器）

南辺に斜行溝 SD 03（幅 3.0 m）があり、SD 02 がこれに注ぐ。SD 04 の北辺には 2・3 期に堀られた大きな土壌がある。東西溝 SD 01（幅 3.9 m 以上）は近世に降る。

遺物 SE 15 の掘形から奈良時代前期の土師器杯、SE 15・19 の埋土から多量の土師器・須恵器のほか木簡 1（□条七尺□□）、II・III 期の軒瓦 4、和同開跡 2、斎串 4、曲物 4、凝灰岩礎石 1 が出上。SB 07 の柱抜取穴、SB 08 の柱掘形、SD 16 の埋土から奈良時代末の土師器皿など、SD 03 の埋土から平安時代前期の黒色土器杯が出土。遺物包含層から円面鏡、灰釉杯、縁釉平瓦のほか多量の埴輪が出上。

まとめ 1 期の遺構は、整然と配置されたものであり、奈良時代のはじめ頃にこの地域が平城京造営の一環として整備されたことを物語る。東西溝 SD 04 は平城宮北面大垣心の延長線から約 36 m（12 尺）北に位置する。SD 04 以南には建物などの遺構がないので、ここを北京極大路々面と考えることが可能である。SD 04 の北は、北辺坊の二坊二・三坪にあたるものと考えられる。南北溝 SD 16 と SD 18 は溝心々距離約 6 m（2 文）で、坊間小路側溝と考えられ、それまで少なくとも 2 町分（二・三坪）を占めていた宅地を東西に分割したことを示すのであろうが、平城京の条坊復原による坊間小路の位置から約 14 m 西にずれる。この点今後の検討を要す。



第14図 第 103 - 16 次調査遺構図

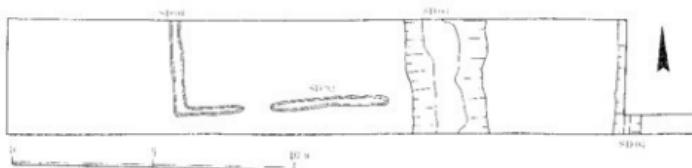
⑦ 右京三条一坊二坪の調査（第 103 - 15 次）

この調査は奈良市北新町における建物新築にともなう現状変更の事前調査である。当該地は平城京左京三条一坊二坪の東南の一角を占めており、水田畦畔の遺存状況から二と七の坪の坪境小路及びその西側溝の存在が予測された。

調査地の土層はトレンチ東端より 4.5 m のところを南北に通る畦畔を境にして少し異なっていた。上から黒灰色土（耕上）、暗灰褐色土（床土）、黄褐色質土で、その下は、東の方では灰褐色砂質土、黄灰白土、西の方では灰色粘質土、黄灰白土である。遺構は灰色粘質土上面で多くの柱穴とその下層で 4 条の溝を検出した。

柱穴は、柱根の残っているもの 5 つを含めて、いずれも小規模で、大きいものでも径 50 cm 足らずである。トレンチ中央付近では 1.65 m 間隔で東西に 3 間、トレンチ西半部では 1.8 m 間隔で東西に 3 間、また、トレンチ西端では 1.5 m 間隔で南北に 1 間、それぞれ柱穴がならぶ。柵あるいは建物の一部になると思われるが、トレンチ調査のため遺構としての性格は明らかでない。

下層の溝は、L 字形に曲がる溝 SD01 と東西溝 SD02 及び南北溝 SD03・04 である。SD01 はトレンチ北端から南 3 m のところで東に曲がり 2 m ほど続いて終る。SD02 は SD01 の東延長線上にあり、長さは 4 m ほどである。トレンチ東端でその西肩を検出した SD04 は、トレンチ南壁沿いを一部拡張した結果、幅約 1 m、深さ約 20 cm である。SD03 は幅 2.8 m 前後、深さ約 50 cm で、坪境小路西側溝と推定される。SD04 との間隔は約 6 m (2 丈) であるが、発掘区東側の水路は改修時の調査で、小路東側溝が検出され、SD04 との間は約 12 m (4 丈) となる。



第 15 図 第 103 - 15 次 調査下層遺構図

V 寺院の調査

① 薬師寺の調査

i) 東僧房北方の調査

薬師寺伽藍整備工事にともなって、摩利支天堂が西塔跡西方から、現売札所の東方に移築されることになり、移築予定地の発掘調査を行なった。調査期間は昭和52年11月14日から26日まで、調査面積は約120m²である。

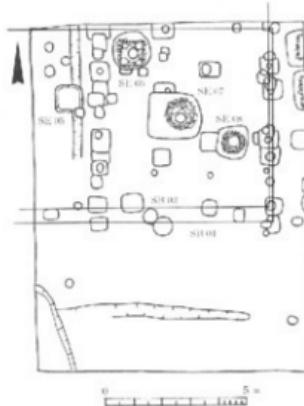
調査地区では約50cmの盛土整地下の旧水田耕作土直下から、多量の土器片を包含する土壤・小穴群を検出した。さらに厚さ約8cmの整地層を除いた地山面から、掘立柱建物2棟、井戸4基、溝2条などの遺構を検出した。

1 遺構

掘立柱建物SB03・04は、発掘区の西に延びる昭和40年調査の旧トレンチに続いて、東西棟になるが、未調査地区にかかる部分が多いために平面形式は明らかでない。2棟とも奈良時代に属する。東僧房の北約50mにあり、食堂にも近く、厨房関係の建物と思われる。

井戸SE06・07・08は発掘区西端にかかる既検出の2基の井戸とともに、いずれも瓦積みで、底に曲物を据えている。出土土器形式によると、12世紀前半から後半にかけて、短期間に使われた井戸と思われる。

井戸SE05は当発掘区では最も古い遺構で、方約1m、深さ約1.7m。井戸枠は遺存せず、瓦・土器・木器・木簡等多量の遺物を出土した。「靈龜二年」の紀年木簡を出土して、井戸の廃絶時期が分り、また、多量の出土瓦はすべて本薬師寺式であることから、薬師寺の造営工事にかかわる井戸であったと推定される。



第16図 東僧房北方調査遺構図

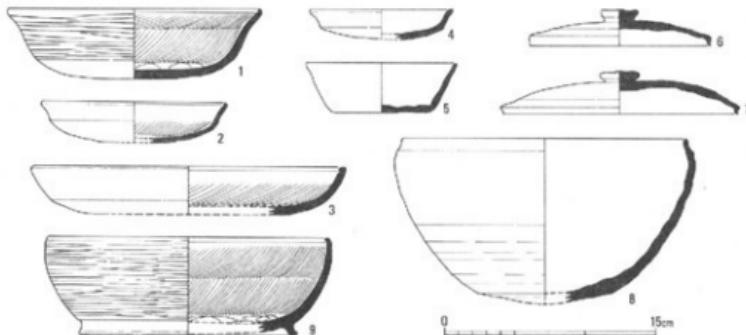
2 遺物

木簡は233点（削片169点）をかぞえ、原型をとどめる木簡は数点のみである。長方形の木片に千字文の習書と「靈龜二年」の年紀をもつものを含め、同年の木簡が3点出土している。全体として習書の木簡が多いのが特徴で、人顔を描いたものや、「靈」の文字とともに龜の絵を墨書きしたものもある。

SE05出土土師器には杯A・皿A・皿C・鉢・甕がある。杯Aには底部内面に螺旋暗文・口縁部外面をヘラ磨きしたもの（1）と、底部に螺旋暗文・口縁部に1段の斜放射暗文を施したもの（2）がある。皿A（3）は螺旋暗文と1段の斜放射暗文を施し、「長集師」「罪」「證」の墨書きがある。皿C（4）は灯明皿である。鉢は平らな底部をもち、口縁部が内弯して内面に螺旋暗文を施す。甕には大型と小型があり、大型に把手がつく。体部外面をハケメ、内面をなでしあげとする。小型品には内外ともなでしあげたものがあり、「奈戸」の墨書きがある。

須恵器には杯A・杯B蓋・鉢A・水瓶・甕がある。杯A（5）は底部外面をヘラ削りで調整する。杯B蓋（6・7）の多くは転用観である。鉢A（8）は鉄鉢形の器で、底部はヘラ削りの平底である。

黒色土器には高台付の杯（9）がある。口縁部は内弯し、端部を内側へ巻き込み、2段の斜放射暗文と、外面に密なヘラ磨きがある。内面のみ黒色を呈し、底部に螺旋暗文がある。



第17図 井戸SE05出土土器(1～3須恵器、4～8土師器、9黒色土器)

ii) 西小子房・十字廊（食殿）地区の調査

今回の調査は伽蓋の復原とその変遷を明らかにするとともに、境内整備計画の資料を得る目的で、薬師寺が調査主体となり、当研究所が調査を行なった。調査地は西小子房地区と十字廊（食殿）地区である。

1 遺構

西小子房地区 西小子房は昭和49年に当研究所が行なった西僧房の調査で一部検出し、その位置・規模を明らかにしている。今回は小子房の間取りを明らかにするため、前回の発掘区に接した北側で発掘調査を行い、西小子房の1房東側・3・4・5房、北側の雨落溝、土壌等を検出した。

小子房基壇は青灰色粘質土の地山上に黄褐色土を約20cm積み上げ構築している。基壇の西南側は中世に沼地となった時期があり、かなり破壊されていたが、東北側は焼土・木炭・瓦で厚く覆われ、比較的良く残っていた。今回の調査で西小子房は2度火災にあってることが明らかとなった。最初の焼亡後再建されているが、2回目の焼亡で廃棄されている。再建前の各房は桁行2間（20尺）、梁行2間（14尺）で、壁で仕切られ、各房の北半はさらに東西2室に分割されている。壁の下には平瓦を両側に立て、その間に瓦を重ねた地覆がある。この地覆の中に一定の間隔で石を据えていた。各房の中央柱西側の床下には木樋が南北に通っている。この小子房は焼亡した後に同位置に再建されたが再度火災にあっており、赤く焼けた幅15cmのスサ入り土壁が高さ5cmほど残存していた。各房は壁で仕切られて、第3・4房にはさらに北半を2室に間仕切る壁がある。北壁は以前の地覆より6cmほど北に寄せている。この土壁の下で焼土・木炭を検出した。木樋は作り直され、木樋の底板の上に瓦破片を詰め盲暗渠にしていた。この掘形中に焼土・木炭・土器が混入している。

後者の火災は3房床面出土の土器の年代より10世紀後半と考えられる。これは昭和49年の西僧房の発掘調査の所見と一致し、「薬師寺縁起」にみえる天暦4年（973）の火災に比定できる。

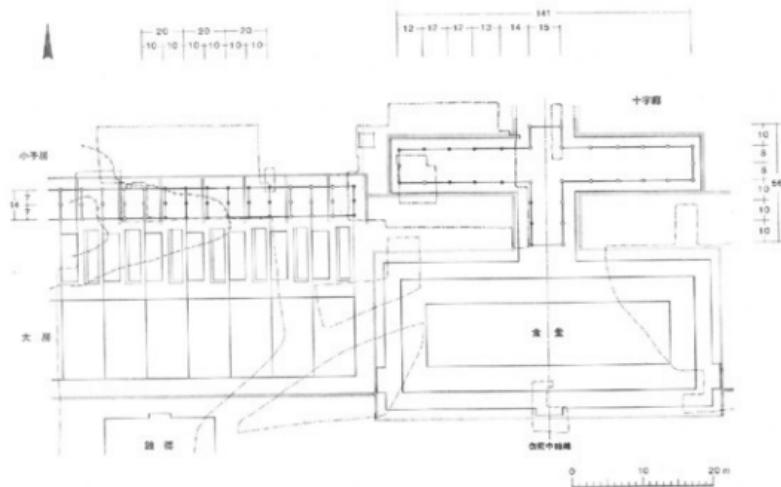
小子房の北側柱より1.5mに埋板を両側に立て杭で押えた幅40cmの雨落溝がある。

この溝には焼土・木炭等を含んでいず、出土遺物・十届より天禄4年の焼亡後に作り直されたことが明らかとなった。この雨落溝の北側には建物はなく、土壤が6個所散在していた。いずれも瓦溜である。

十字廊（食殿）地区 十字廊は「薬師寺縁起」によれば東西14丈1尺、南北5丈6尺と記載され、他の堂宇の規模の記載方法との相違から平面十字形の建物であり、かつ天禄4年（973）の火災の失火元にあたり、他の堂宇の類焼状況から考え、食堂の後方にあると推定してきた。今回はこの十字廊の西半分で発掘調査を行ない十字廊・雨落溝・井戸・土壤等を検出した。

十字廊の基壇は後世に搅乱をうけており、礎石が抜き取られたり、土壤が掘られたりしていたが、良く残っていた。十字廊基壇は掘り込み地業をせず、青灰色粘質土の地山上に茶褐色の山土を30cmほど積み上げ、凝灰岩の羽目石を地山に直接立て基壇化粧をしている。石は伽藍中軸線の西4mで鉤の手に南・北に延びている。十字廊は前回調査した食堂と西側柱筋をそろえているので、十字廊と食堂は伽藍中軸線に対称の建物で、桁行が同じであることが明らかとなった。礎石据えつけ痕跡をもとに復原した十字廊の桁行は11間で、柱間寸法は、中央間15尺・脇間14尺・次間13尺・端3間各12尺となる。梁行は2間、8尺等間である。さらに中央間の柱にあわせて、南に3間（10尺等間）分延びている。北にも基壇が張り出しているので、中央間より北にも建物が続くことは明らかで、十字廊が「縁起」記載の十字形の建物であることが確認された。「縁起」にみえる十字廊南北5丈6尺からすると、北への張り出しは10尺と推定される。十字廊基壇の西・南に接して幅50cmの雨落溝がめぐっている。また中央間より南に延びる基壇の西20cmには食堂より続く幅40cmの雨落溝が通っている。基壇に掘られた土壤から出土した遺物の年代より、十字廊は平安時代末には廃絶していたと考えられる。

十字廊基壇の西北部に井戸がある。井戸の掘形西端に内法2mの井籠組の井戸枠を据えている。この井戸内より奈良時代中頃の土器が出土した。基壇およびその周辺に土壤が散在していた。いずれも瓦溜である。



第18図 薬師寺小子房・十字廊（食殿）復原図
（単位は尺）



第19図 薬師寺十字廊（食殿）西から

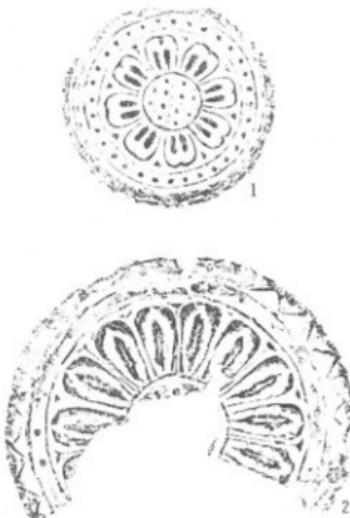
2 遺物

西小字房・十字廊両地区から出土した遺物には多量の瓦のほかに土器・金属製品などがある。

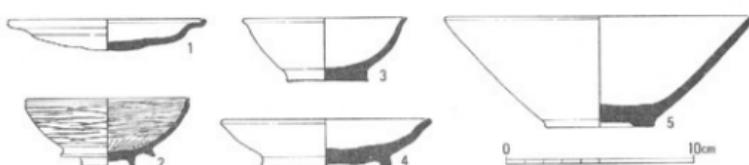
瓦 最も多く出土した軒瓦は、平安時代以降の瓦をのぞき、西僧房の場合と同じく、軒丸瓦6276と軒平瓦6641の両者である。奈良時代の瓦としては他に、軒丸瓦6282・6291・6304・6307・6314の5型式が、軒平瓦6663・6664・6671・6691・6702・6763の6型式が出土しているが、出土量は少ない。このほかに新型式の瓦(第20図)が出土した。特に軒丸瓦2は直径30.5cmで特別大型である。以上の瓦のほかに十字廊基壇に掘られた中世の土壤から長方形の綠釉極先瓦が数点出土した。

土器 土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・綠釉陶器・二彩鉄鉢・灰釉陶器・中国製の磁器等が出土した。この中で最も出土量が多いのは土師器である。井戸中より出土した奈良時代中頃の甕の一つには墨書「三寶」「人足」がある。これらのほかに蹄脚硯・灰釉の宝珠硯等も出土している。

金属製品 銅線を渦巻状に巻き上げた蝶巻、銅製の蝶番、鉄釘、白銅製の箸、金箔が各1点出土している。



第20図 十字廊地区出土瓦(1/6)



第21図 小字房・十字廊地区出土土器(1 土師器、2 黒色土器、3・4 緑釉陶器、5 青磁)

iii) 南大門の調査

本調査は、奈良市の水道管取換え工事に伴なう立会調査である。この工事によって、現南門基壇南側が道路沿いに幅約70cm深さ1.4m掘削された。これは、旧南大門の南側柱の北側に位置する。この基壇部分について調査した。

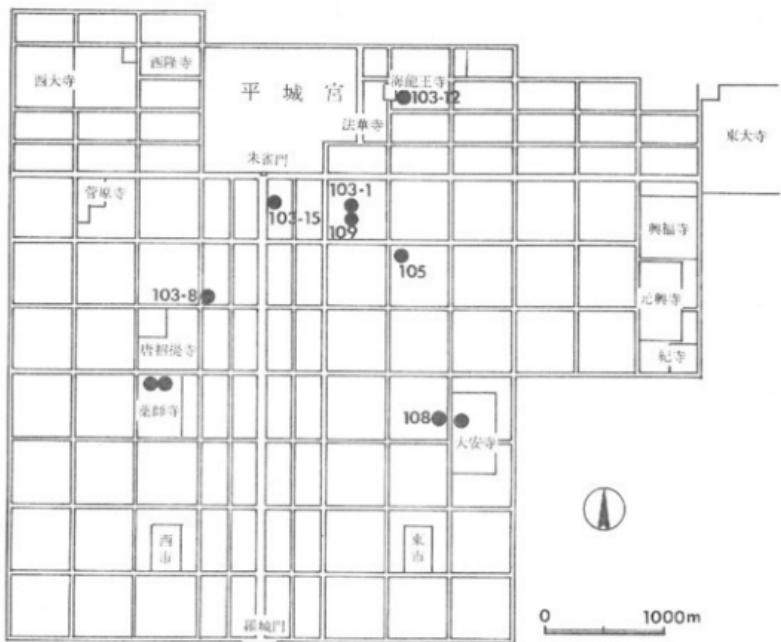
基壇は掘込み地業をしておらず、現地表面から約1.6m下にある青灰色粘土の地山の上に、砂質土と粘質土を積み重ねて構築されていた。この工法は版築とはいがたい。積土は、地山面から約1.35m残存していた。

基壇東・西端の基壇化粧の上半部は、既に失なわれていたが、延石が残存していた。この延石は幅約41cmで、延石外面東西間距離は約34.3mであった。延石の位置は、伽藍中軸線に対してほぼ対称である。また、西側の延石上に地覆石の痕跡が認められた。なお、旧南大門中央間の南側西寄りの柱掘形（幅約1.7m）を検出した。この掘形埋土中には炭化物が混っていた。

② 法隆寺西大門脇の調査

法隆寺西南院北面築地の西端近くで、家屋撤去に伴う事前調査を行なった。

検出した遺構は築地3条・溝1条・井戸1基で、4時期に区分できる。第1期は現存築地より西でやや南に振れる。築地（幅0.9m以上）とこれと平行する南の雨落溝（幅0.5m、深さ0.2m）がつくられた時期である。築地は地山を削って基部をつくり出している。その下端から雨落溝までの間（犬走り）は幅1.0mで、西に高くなっている。築地も本来西面大垣寄りで高くなっていたのであろう。溝埋土からは鎌倉時代の瓦器椀が出土している。第2期は溝の埋没後に井戸が設けられた時期である。調査区の東南隅の掘形の一部を検出したのみで詳細は明らかでない。井戸埋土からは室町時代の軒瓦が出土している。第3期は井戸埋没後に東西築地に取付く南北築地（西面大垣地覆石東面から約9m）が設けられた時期である。地覆石は人頭大の川原石を幅0.7m2列に並べたもので、南にやや降っている。第4期は全面に厚さ0.3mの整地を行ない、現存築地と同じ方位の東西築地が設けられた時期である。地覆石は割石を用いたもので、現存築地と一体のものと考えられる。時期は整地土から出土した軒瓦などから江戸時代に比定できる。



第22図 平城京調査位置図